

Title	鎌倉時代の特異な薬師立像と一日造立仏との関わりについて
Sub Title	A study of the relationship between unique Yakushi images in the Kamakura period and Ichinichi-zōryūbutsu
Author	西木, 政統(Nishiki, Masanori)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2014
Jtitle	哲學 No.132 (2014. 3) ,p.221- 253
JaLC DOI	
Abstract	Unique life-size Yakushi Nyorai sculptures characterized by wavelike hair, the left elbow bent at a right angle with the forearm thrust forward, as well as abbreviated forms of expression in the hair and the pleats of the robe, may be found around the Kamakura area. However, because these types of Yakushi images are highly unusual, we may assume the existence of other images that served as models for them. In this paper, I will examine the iconography of such images while arguing that their wavelike hair was originally derived from the Shaka Nyorai at Seiryō-ji Temple, and the characteristic left arm, from the Yakushi Nyorai image at the Konponchū-dō at Enryaku-ji Temple. In addition, by comparing these images to records found in Azuma kagami, I will suggest the possibility that they were created as Ichinichi-zōryūbutsu—images made in response to urgent requests and thus characterized by abbreviated forms of expression—and clarify the importance of these unique Yakushi sculptures which were created around Kamakura during the Kamakura period.
Notes	特集：論集 美学・芸術学： 美・芸術・感性をめぐる知のスパイラル(旋回)#挿表
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000132-0221

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

鎌倉時代の特異な薬師立像と 一日造立仏との関わりについて

——西 木 政 統*——

A Study of the Relationship between Unique *Yakushi* Images in the Kamakura Period and *Ichinichi-zōryūbutsu*

Masanori Nishiki

Unique life-size *Yakushi Nyorai* sculptures characterized by wave-like hair, the left elbow bent at a right angle with the forearm thrust forward, as well as abbreviated forms of expression in the hair and the pleats of the robe, may be found around the Kamakura area. However, because these types of *Yakushi* images are highly unusual, we may assume the existence of other images that served as models for them. In this paper, I will examine the iconography of such images while arguing that their wavelike hair was originally derived from the *Shaka Nyorai* at Seiryō-ji Temple, and the characteristic left arm, from the *Yakushi Nyorai* image at the Konponchū-dō at Enryaku-ji Temple. In addition, by comparing these images to records found in *Azuma kagami*, I will suggest the possibility that they were created as *Ichinichi-zōryūbutsu*—images made in response to urgent requests and thus characterized by abbreviated forms of expression—and clarify the importance of these unique *Yakushi* sculptures which were created around Kamakura during the Kamakura period.

* 慶應義塾大学文学部助教

はじめに

寛和三年（987）、東大寺僧齋然によって請来された、三国伝来と称される釈迦如来立像（現京都・清凉寺蔵）（図1）は、「波状」（縄状・渦巻き状とも）の頭髮（図2）、通肩の着衣形式やその水波状衣文など、日本にあつては特異な表現を持つことで知られる。その後、朝野の尊崇を集め、鎌倉時代以降は天台宗や真言律宗を中心とした釈迦信仰、さらに生身仏・靈驗仏信仰の高まりにしたがって模刻像が数多く造立された¹。それらは「清凉寺式釈迦如来像」と呼ばれ、現在100軀に及ぶ現存作例が確認されている²。

ところで、この清凉寺式釈迦如来像に該当しないものの、一部その特徴を取り入れた作例が知られているが、とりわけ波状髪を借用した薬師如来像が多くみられる点は注目される³。本稿では、なかでも左手を屈臂して前方に突き出し、頭髮や衣文を簡略にあらわすという容姿を共有する一群について論じる。

対象作例については表1をご参照いただきたいが⁴、北は山形から南は福岡まで広く所在するとはいえ、とくに関東に集中する点が注目される。制作年代の下限は15世紀に求めたが、建長八年（1256）の銘記を有する神奈川・東光寺像（図3）を上限として、広く鎌倉時代、13世紀から14世紀にかけて作例がみられる。本稿では、個々の作例について深く触れることはできないが、なかでも東光寺像および太岳院像（図4）、楊谷寺像（図5）の造形的類似には興味をもたれる。いずれも等身の薬師如来立像であり、頭部を清凉寺式の波状髪、着衣を通肩とするか、覆肩衣を着けて両肩を衣で覆い、衣文を省略してあらわす点、さらには構造技法上の類似が指摘されており、揃って神奈川県内に伝来することも併せて、その関係性が注目されてきたものである⁵。

たとえば、太寧寺像（図6）に注目された瀬谷貴之氏⁶は、通肩の着衣にあらわし、衣文線をおおづかみにあらわす表現の典拠として、その靈驗



图 1 清凉寺
释迦如来立像

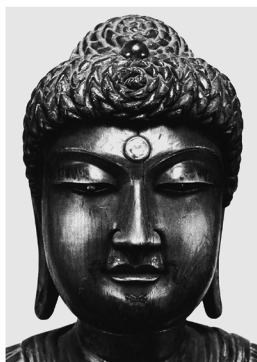


图 2 清凉寺
释迦如来立像（头部）



图 3 東光寺
藥師如来立像



图 4 太岳院 藥師如来立像

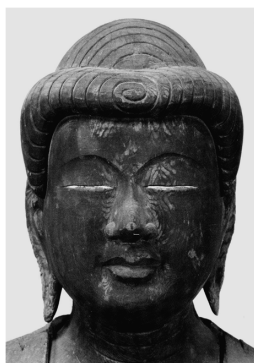


图 8 東光寺 藥師如来立像（头部）



図5 楊谷寺 薬師如来立像



図6 太寧寺 薬師如来立像

で知られた善光寺式阿弥陀如来像を挙げ、頭髪の典拠である清凉寺式釈迦信仰と併せて、靈驗像の合体尊であるとする見解をあらわされている。着衣形式および衣文表現の解釈を金銅仏に求められた点には興味をひかれるものの、左手を屈臂して前方へ伸ばす印相については「薬師如来特有の姿」とするに留めておられ、いまだ考察の余地があると思われる。

改めて対象作例について確認するならば、建長八年（1256）の銘記を有する神奈川・東光寺像を上限としていること、東光寺像にその造形や制作技法が類似する貞治三年（1364）の制作とみられる太岳院像⁷、文明十三年（1481）の楊谷寺像など、南北朝時代にかけてなお忠実に東光寺像の作風を襲うかのごとき作例があることを踏まえると、そこには強い規範性をもつ薬師造像の存在が想定されよう。また、記録に残る薬師造像のなかに

もその類例が見出される可能性は十分にある。

そこで、本稿では、以下その図像的特質について若干の分析を試みた後、『吾妻鏡』にあらわれる薬師信仰について検討を加え、一連の特異な薬師造像がみられる背景の一端を明らかにしたい。

1 図像的特質の検討

まず、図像として最初にみるべきは、その頭髮表現である。この波状髪と称される頭髮は、もとはインド・ガンダーラ彫刻にみられるウェーブ状の表現であったものだが、直接的な典拠が清凉寺釈迦如来像およびその模像である清凉寺式釈迦如来像に求められることについては、奥健夫氏⁸によってその経緯が明らかにされている。本来は清凉寺式釈迦如来像に特有の表現であった波状髪が、久寿元年（1154）の京都・峰定寺藏千手観音像の頭上面を上限として、観音の頭上面や化仏を中心として限定的に他の造像に取り入れられていくという奥氏の指摘を参考にするならば、本稿にて扱う一群についてもその典拠は清凉寺釈迦如来像であるといっていよう。

ただ、清凉寺像はもとより、清凉寺式釈迦如来像の大半が、髪束一条一条に括りを入れ、ねじれの表現を意図するなど、忠実に原像を写そうとつとめているのに対し（図7）、波状髪を有する薬師如来像のいずれにもそうした表現がみられず、とくにこの一群においては、簡単な線刻によって渦をあらわすのみである点は留意される（図8）。頭上面や化仏にみられた簡易な表現が普及した結果ともみられるが、清凉寺式釈迦如来像のものとこれほど異なる理由は他に考えるべきと思われる。

なお、波状髪が薬師如来像の表現に取り入れられた背景には、やはりまずはそれより早く頭上面に取り入れられた経緯を考えるべきだろう。観音經典に説かれる「頂上仏面の疫病消除の効能」を拝者に確信させる機能が期待されたという奥氏の指摘を踏まえれば、もともと「病苦消除」を本旨

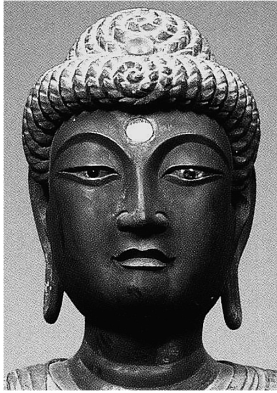


図7 三室戸寺 釈迦如来立像（頭部）

とする薬師如来の利益との類似から採用されたものとも考えることもできる。もちろん、中世以来霊験により知られる清凉寺釈迦如来像の頭髪を借用することで、その利益を補う意味合いがあることも見逃せない。



図9 神護寺 薬師如来立像

つぎに、左手を屈臂して前方へ突き出した印相についてみるならば、より一般的には腕を垂下し、やや前方へ曲げる手勢が多いといえ、このようにほぼ直角に曲げる例はむしろ限られたものであると思われる。たとえば、その代表的なものに平安時代前期に遡る神護寺像があり（図9）、つづいて、やはり平安時代前期、9世紀から10世紀頃を中心として、大阪・孝恩寺像や、もと奈良に伝来したという新潟・貞観圖像など、幾つか作例を見出すことができるが、平安時代後期以降には少なくなるものである。

ここで注目したいのは、現存しないものの、同じく平安時代前期の薬師如来像として、おそらく日本で最も信仰を集めたであろう、比叡山延暦寺根本中堂像である。最澄没後まもなく、相ついで根本中堂像とその特徴を同じくする薬師如来立像が造立されているが⁹、とくに10世紀以降、多

くみられるようになる根本中堂像の模像、また根本中堂像を志向する薬師如来像は、「天台系薬師」と呼称されている¹⁰。

ところが、根本中堂像が秘仏のうちに焼失の憂き目をみたため、その像容、とりわけ印相については平安時代より議論が続いていた。たとえば、恵什の所伝ほか諸図像集では施無畏与願印と説かれ¹¹、天台宗の百科全書というべき光宗の『溪嵐拾葉集』では智吉祥印とされており¹²、先行研究でも見解がわかれている¹³。しかし、近年、津田徹英氏¹⁴が『四帖秘決』（建保年間〔1213～1219〕成立）から見出された記述によって、初門釈迦印といわれる、左手を屈臂して前方へ突き出したものであると判明したことは大変興味深い。

中堂ノ本尊ヲ拝-見スルニ奇異ノ事アリ。印相ヲ見ルニ初門釈迦ノ印也

右御手ハ大指ヲ以中指ノ甲ノソハヲ捻シテ小指水指頭指之ヲ立タリ。左御手ハ只御袖ヨリ指出シテ。臂ヲ身ニ付テ掌ヲ仰テ五指ヲノヘテ〈但之ヲ稍屈〉ユヒノサキヲ直ニ前ノ方ニ向タリ。初門ノ印ハ。左手ハ横ニ心ニ置ク。是ハ不而。只指シ出タルママニテ指ヲノヘタリ

右ノ御手ハ。事外ニ上ニアケテ肩ニヒトシ。御身金色衣文綵色也。等身ノ立像也¹⁵

該当箇所は、元久二年（1205）、火災から救出された根本中堂本尊を実見した慈円が、その感想を述べているところである。そこには、「中堂の本尊を拝見するに、奇異の事あり」として、印相は「初門釈迦印」に近いものとされている。ただし、初門釈迦印とは異なり、左手を胸前に置かない、とあるため、厳密には規定の印相ではなく、長岡龍作氏¹⁶の指摘にあるように、「左腕を強く屈曲し何らかの持物を執るかたち」であったと考えられる。これに近い印相を現存作例に求めるならば、長岡氏も挙げる京都・法界寺像¹⁷がある（図 10）。もともと比叡山にあった最澄自刻と伝える銅造薬師像（三寸）を納める鞘仏として永承六年（1051）頃に造られたとみられるが、こうした天台のゆかりある同像が、『四帖秘決』にみえ

る根本中堂本尊と印相を同じくする点は留意される。

また、本稿で扱う一群との関連で注意すべきは、この火災の際には、慈円のみならず、ほかにも天台僧が本尊を実見していると判明する点である。

同八日、召大佛師法眼觀圓。於北禮堂敷淨薦引新幕、於其内六天十二神将日月等被加修理、三ケ日佛師香湯洗浴着新淨衣、小佛師二人同召之。和上着新淨衣、内外共淨密入御帳内、奉拜本尊。長講一人指紙燭參。又、忠快・豪圓等同參入、四人共入帳内、如此經沙汰事三ケ日也¹⁸

史料からは、慈円のほか、忠快や豪円も本尊を拝したことが明らかである。とくに忠快といえ、後で触れるように、鎌倉でも活躍した天台宗山門派の僧侶で、とりわけ三代將軍実朝の帰依を受けたことで知られるが¹⁹、こうした僧侶が本尊を実見していることから、鎌倉でもそうした知識が広まっていた可能性が想定される。後述するように、鎌倉において天台僧による薬師信仰が盛んであったことを考慮すれば、対象作例の印相が、根本中堂本尊を意識したうえでの選択である可能性も十分ありうと思われる。

簡略な造形については、既に述べた通り、金銅仏風という指摘による、善

光寺式阿弥陀如来像との共通性を重視する見解がある²⁰。ただ、改めて像容を見比べるならば、金銅仏という材質による制約以上に、やはり簡略化の印象がぬぐえないこと、またその延長線上にとらえられるものだが、太寧寺像を除き、彩色や漆箔を施さない素地仕上げとする点も、金銅仏写しとの解釈からは解明されない問題として挙げられる。むしろ、平安時代前期によくみられたような、木彫としての質感を重視し、あ

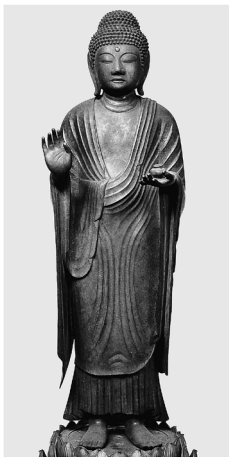


図10 法界寺 薬師如来立像

るいは入念な仕上げを施さない点に価値を置く表現と考えるべきではないか。詳しくは後述するように、制作時間における制約を意図した表現である可能性を考慮したい。

最後に、そもそも立像である点も、薬師造像、あるいは少なくとも一堂の本尊と扱われるような造像にあって、鎌倉時代以降には珍しいことに留意したい。もちろん、同様に坐像の多かった阿弥陀如来像について、当時、来迎思想の普及により立像が多くなるとの指摘はあるものの²¹、薬師如来像については依然として坐像が多く、養命寺像や東漸寺像など、鎌倉地方の代表的な現存作例をみても、鎌倉時代から後はやはり坐像が多い²²。

一方、立像としては、平安時代前期には神護寺像のような一木彫成による薬師如来像が多くみられた。そのなかで注目すべきは、既に述べた根本中堂像の模像である天台系薬師如来像であった。しかも、法量が等身に近い点も、根本中堂像が等身ないし五尺五寸と伝えていたことに符号し、肩覆衣を着ける作例があるのも、この時期の薬師立像に倣うとも考えられる。坐像が多い鎌倉時代の薬師造像にあって、揃って立像形式を選択した背景を考える際に、やはり根本中堂像の存在は見逃せない。

以上、頭髮、印相、表面仕上げ、立像という視点から対象作例に分析を加えたが、とりわけ印相において、根本中堂本尊像の存在を考慮する必要を認めた。ただし、根本中堂像といえば、「朱衣金体」、すなわち着衣を朱または赤色とし、肉身を金色または漆箔と伝える点が、ここで扱う薬師如来像とは異なるため、これらを天台系薬師とするには躊躇される。

しかし、印相が火災後に判明した根本中堂像の実際に近いかたちである点、また根本中堂内にあった他の薬師如来像、とくに七仏薬師像については「檀像」と伝え、素地仕上げであったことが確認される点にくわえ²³、そもそも根本中堂像についても、義真によって朱衣金体とされる以前は素地仕上げであったと考えられる点、また先にみた法界寺像が、截金を押しながらも素地仕上げとする点を踏まえれば、その大きさ、姿勢から、表面

仕上げに至るまで、天台系の薬師如来像に共有される特徴が見出されることに気づかれよう。

そこで、根本中堂本尊を志向するような薬師造像が、鎌倉時代、とりわけ鎌倉を中心とした地域にあって行なわれえたかどうか検討しなくてはなるまい。中世鎌倉の信仰について考えるには、やはり鎌倉幕府の正史である『吾妻鏡』をまず参照すべきであろう。以下、同書にあらわれる薬師造像について検討し、後世の薬師造像における規範となるべき事例を求めたい。

2 鎌倉時代の薬師信仰

鎌倉時代の薬師信仰についてふりかえるために、『吾妻鏡』の記載から抽出した薬師関連の記事をまとめた表2をご参照いただきたい。従来の研究に基づいて概観するならば、たとえば坪内綾子氏²⁴が指摘されるように、とりわけ源頼朝や実朝を中心とした将軍家による信仰と、北条時政にはじまり、義時・時頼に強うかがわれる北条氏累代による信仰が特筆される。公家の日記と比較された今井雅晴氏²⁵は、「鎌倉・京を通じ、病氣回復と息災、安産と長寿を祈るのが薬師如来への信仰の目的」であったと述べておられるが、大過なかならう。ただ、実際の造像については現存作例に乏しく、研究が少ないことも確かであるため、とくに薬師造像についてうかがえる記事を抜き出したものが以下の通りである。

①建久四年（1193）十一月二十七日条

源頼朝、永福寺薬師堂を建立・供養

建久五年（1194）十二月二十六日条

源頼朝、永福寺に薬師堂を新造

②建仁三年（1203）九月二日条

北条時政、名越邸にて薬師如来像を供養

③承元二年（1208）十二月十二日条

源実朝、鶴岡八幡宮神宮寺に薬師如来像を安置

④建暦元年（1211）十一月十六日条

北条政子，鶴岡八幡宮神宮寺に金銅薬師三尊像（三尺）を安置

⑤建保四年（1216）五月十日条

源実朝，持仏堂に七仏薬師像を安置・供養

⑥建保六年（1218）十二月二日条

北条義時，大倉薬師堂に運慶作の薬師如来像を安置・供養

⑦承久三年（1221）十二月十一日条

北条義時夫人発願の薬師如来像，産所にて供養

⑧寛喜三年（1231）十二月二十六日条

太一定分厄の御祈に薬師・観音・不動を造立・供養

⑨嘉禎元年（1235）十二月二十七日条

将軍（藤原頼経）不例，康定が千体薬師像（一尺六寸）など造立

⑩寛元四年（1246）九月二十七日条

北条時頼，「殊なる所願」により薬師如来像を造立

⑪建長三年（1251）一月八日条

北条時頼，夫人の安産祈願に金銅薬師如来像（八寸）を造立・供養

⑫建長五年（1253）四月二十六日条

北条時頼，両子息の祈祷に七仏薬師像を造立・供養

⑬文応元年（1260）八月十二日条

北条時宗，将軍（宗尊親王）御悩により，一日中に将軍と等身の薬師如来像を造立・供養

⑭弘長三年（1263）三月十日条

北条時頼，病悩により，一日の内に等身の薬師如来像を造立・供養

ここで注目したいのは，後世の規範となるべき重要な造像に，立像が見当たらない点である。以下，順にみたい。

①源頼朝によって，奥州征伐を含む源平争乱の戦没者供養を企図して造営された永福寺には，二階堂と呼ばれた釈迦堂に伴い阿弥陀堂と薬師堂が

あったことが知られるが、他にもう一つ薬師堂のあった可能性がある²⁶。一方について詳細は全く知られないため、いま阿弥陀堂と対になる薬師堂についてみれば、堂宇の規模から丈六の坐像を安置したと推測される。ただ、永福寺が倣ったとされる奥州毛越寺については、安置尊像を『吾妻鏡』に伝えており、たとえば毛越寺金堂と呼ばれた円隆寺には「薬師丈六」が、同じく毛越寺内にあった嘉勝寺にも「薬師丈六」が安置されていたという。やはり、頼朝の建立にかかり、鎌倉で最も権威のある永福寺薬師堂の薬師像は丈六の坐像であった蓋然性が高い。

また、③源実朝が鶴岡八幡宮内の神宮寺に安置し、開眼供養前に自ら実見に及ぶほどの篤い信仰を寄せた薬師如来像については、今日に伝わらず、像容も知られない。しかし、かつて神宮寺にあったとされ、廃仏毀釈によって神宮寺が廃絶した際に寺外へ出て、いま東京・新開院にある薬師三尊十二神将像が参考となるが²⁷、こちらもやはり坐像で、印相も通常の膝上に掌を置くかたちである。

一方、④北条政子がやはり神宮寺に安置した金銅薬師三尊像（三尺）は、伝来の検討によって、寿福寺に所蔵される薬師如来坐像であることが論証されており²⁸、正史に残る薬師造像の遺例と確実に判る唯一の作例として大変貴重なものだが、これも坐像である。

以上は将軍家の薬師造像だが、北条氏の信仰を知るうえで欠かせない、⑥北条義時の建立による大倉薬師堂（現覚園寺）の本尊薬師如来像も坐像としている。当初像は建長三年（1251）に焼失しており、現存像は再興像であるとはいえ、理由もなく立像から坐像に変更するとも考えがたく、当初像もやはり坐像であったと考えるべきだろう²⁹。

このように、当時一般的に一堂の本尊となるような薬師如来像は坐像であったことが知られ、ここで扱う対象作例の規範となるべきものは見出されなかった。とはいえ、像容の知られない薬師造像も数多くみられ、あるいは立像のものもあったと考えるべきだろう。そのなかで興味深いのは、

先ほど挙げた造像例を含めて、天台僧の関与が度々うかがわれる点である。

たとえば、⑤源実朝が持仏堂に安置・供養した七仏薬師像は、像容については何ら伝ええないものの、供養導師が天台僧忠快であり、さらに七仏薬師法を修していることが注目される。つづいて、⑩北条時頼が「殊なる所願」によって薬師如来像を造立しているが、御衣木加持は忠快と並びこの頃の鎌倉天台を代表する隆弁であることが知られる³⁰。また、⑪北条時頼が夫人の安産を祈願して造立した金銅薬師如来像（八寸）、⑫同じく時頼が両子息の祈祷のために造立した七仏薬師像も、いずれも供養導師を天台僧隆弁としており、鎌倉における薬師信仰と天台との関わりを考えさせるものといえる。

周知の通り、『吾妻鏡』は文永三年（1266）で記載を終えるが、終わりに近づいた頃、対象作例との比較において興味深い記事が見出される。

まず、⑬文応元年（1260）に北条時宗が将軍（宗尊親王）の体調不良によって、一日中に将軍と等身の薬師如来像を造立・供養したと伝え、続いて⑭弘長三年（1263）には北条時頼が病氣平癒を祈願して、やはり一日の内に等身の薬師如来像を造立・供養させている。発願者を別としながら類似した内容であるとともに、注目されるのは供養導師がともに尊家という僧侶であったことである。

これまで、規範となるべき立像の作例が見出されず、また天台僧の関わる薬師造像が多い点に注意してきたが、以下この二例に対して検討を加えつつ、一日の内に制作される「一日造立仏」およびこの事例に関わった天台僧尊家について取り上げ、対象作例の典拠として考えられる可能性を提示したい。

3 一日造立仏との関係

以下、それぞれ記事内容を引用する。

文応元年（1260）八月十二日条

十二日丁未、晴、依御惱事、爲相模太郎殿御沙汰、一日中被造立薬師像〈將軍家御尊身〉供養導師尊家法印、又被始行薬師法³¹

弘長三年（1263）十一月八日条

八日乙酉、依相州禪室御勞事、被加御祈祷等、先今日中造立等身千手菩薩之像、有供養之儀、導師松殿僧正良基也、即以伴僧十二人、相共被修晝夜不斷千手陀羅尼、僧正斷五穀、伴僧有一日三箇度行水〈云云〉、次尊家法印於園殿、被修延命護摩、次陸奥左近將監義政、一日之内造立等身薬師像、請尊家法印爲導師、被遂供養〈云云〉、又尊海法印帶等身薬師畫像、七箇日爲令參籠于三嶋社、今晚進發、修三時護摩、可信讀大般若經〈云云〉³²

まず、文応元年の記事によると、赤痢に罹患していた將軍宗尊親王が、相模太郎（北条時宗）の沙汰により、一日で薬師如来像を造立したことがわかる。しかも、「將軍家御尊身」と明記していることから、これが宗尊親王と等身であったことが知られよう。ただ、像容については、立像か坐像かを含めて明らかでない。

つぎに、弘長三年の記事によると、相州禪室（北条時頼）の病氣平癒を祈願して、まず時頼と「等身」かと思われる千手観音像が一日で造立され³³、ついで北条義政の沙汰により、一日でやはり時頼と等身と思われる薬師如来像が造立されたことがわかる。一日で等身の薬師如来を造立するとは、先ほど紹介した文応元年の例に倣ったものだろうか。さらに、ついでに等身の薬師画像を持たせ、七日間、三嶋社に参籠させたとある。一連の記事は、時頼の病氣平癒を祈願して、別々の発願者がそれぞれ供養導師に命じて個別の供養をなしたものと考えるべきで、今それぞれを別個の事例と考えると、わずか三年ばかりを隔てて、等身の薬師像を一日で造立していることになる。

いずれにせよ、まずは一日で仏像を造立する行為（以下、一日造立仏と称する）について知る必要があろう。従来、平安時代の造像例については史料面から検討を加えられてきたが³⁴、残念ながら実作例は知られておら

ず、また鎌倉時代についてはその実態がほとんど未解明であった。ところが、近年、鎌倉時代に実作例を二件指摘するとともに、一日造立仏について詳細に検討を加えた注目すべき見解が、奥健夫氏³⁵により出されている。

以下、奥氏の研究に導かれつつ考察を進める。そもそも一日造立仏とは、「切迫した願意により像を短い時間で造り上げるという行為」であり、院政期頃から貴顕による造像例が知られている³⁶。先ほども述べた通り、従来はこうした記録でしか知られていなかったが、奥氏によると、像内銘などから、一日で造立されたことが判明する作例が二例あるという。それは、弘安元年（1278）銘の奈良・西方寺藏薬師如来立像（像高 167.2 センチ）³⁷（図 11）と、徳治三年（1308）銘の京都・廃燈明寺伝来（川合芳次郎記念仏教美術財団蔵）不空羼索観音立像（像高 180 センチ）（図 12）である。この二作例は、ともにカヤ材からなり、表面を素地仕上げとし、螺髪・毛筋を刻まないうえに、衣文線が少ないなど、総じて簡略化された造形が共通しており、記録にみられる一日造立仏もおよそこうしたものだったのではないかと考えられた。

両作とも、一見すると、とても一日で造られたようにはみえないが、西方寺像は接着剤を使わず柄と鏝のみで組上げており、表面に漆箔や彩色といった仕上げをすることもないため、短時間での制作を想定することが可能である³⁸。そして何より、本稿で扱う一群の作例との比較において興味深いのは、西方寺像が、簡単にあらわされた波状髪（図 13）を持つ薬師如来立像とされる点である。ただ、印相こそ通例のものというべきものだが、少なくとも、一日で造立されたと記録に残る等身の薬師如来像が、こういうものであった可能性は十分ある。かつて、脇本十九郎氏³⁹は鈿彫像の背景に「頓作」という概念を充て、「加持祈祷の為に急遽造顕する仏像を指す」と説明したうえ、「一日又は数日能く造仏の功を畢って、その新造仏を以て祈祷を行う風習」として、こうしたなかに荒彫像（鈿彫像）の混在する可能性を指摘されていた。荒彫像・鈿彫像の発生について

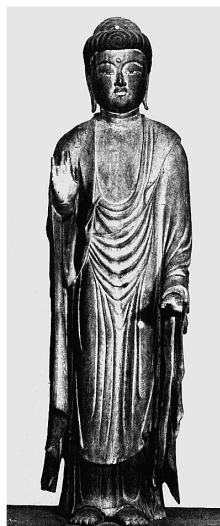


図 11 西方寺
薬師如来立像



図 13 西方寺
薬師如来立像（頭部）



図 12 川合芳次郎記念仏
教美術財団
不空絹索観音立像

は、後述のとおり微妙な問題を孕んでいるが、一日造立仏に想定される表現として、傾聴すべき見解といえる。

さらに興味深いのが、それらの現れる年代である。たとえば、本稿で対象としている一連の作例が、建長八年（1256）銘の東光寺像を上限としているのに対して、一日造立仏が『吾妻鏡』中にあらわれるのは文応元年（1260）と弘長三年（1263）のみであり、一日造立仏の現存作例は弘安元年（1278）を上限としている。それぞれに具体的な関係こそ見出されないものの、すべて1260年代以降に集中していることを踏まえれば、共通した時代背景を想定すべきではないか。そして、一日造立仏に他でもない薬師如来がみられる点こそ、造形に簡略化された印象を与える一連の対象作例を考える際に見逃せない要素と考えられよう。

ここで、一つの背景に参照すべきものとして、『吾妻鏡』の記事にみられる供養導師に注目したい。いずれも天台僧尊家を導師としており、あく

まで個別の供養において薬師仏を一日で造立させているのにくわえて、その導師を同じくするからには、この人物が尊像の選択にも関わった可能性がある。

以下、尊家については、平雅行氏⁴⁰の研究を参照しながら考察を続ける。尊家（1207～1273）とは、青蓮院門跡に仕えた後、門跡内紛争により鎌倉へ至り、その後日光山や勝長寿院別当に就任するなど、鎌倉に活躍した天台僧であり、北条時頼時代の山門派の中心人物である。平氏のまとめられた尊家の年譜を通覧して興味深いのは、生涯を通じて薬師法の修法に従事している点である。

嘉禎三年（1237）三月十九日	七仏薬師法（助修）
暦仁元年（1238）十一月二十九日	七仏薬師法（伴僧）
延応元年（1239）六月四日	七仏薬師法（伴僧）
仁治元年（1240）二月二十一日	七仏薬師法（伴僧）
寛元元年（1243）六月六日	七仏薬師法（助修）
寛元二年（1244）二月二十六日	七仏薬師法（伴僧）
寛元三年（1245）十月一日	七仏薬師法（伴僧）
宝治元年（1247）九月五日	七仏薬師法（助修）
建長元年（1249）二月二十三日	薬師法（伴僧）
文応元年（1260）八月十二日	一日等身薬師像を供養
弘長三年（1263）十一月八日	一日等身薬師像を供養

助修や伴僧をつとめる機会が多かったとはいえ、とりわけ七仏薬師法に通じているのに加え、暦仁元年（1238）の修法が根本中堂で行なわれたものであることは見逃せない。

ここで改めて注目すべきは、先ほどとりあげた二例が、尊家自ら供養導師をつとめた重要な修法だったということである。残念ながら、その薬師如来像は像容が一切知られない。しかし、天台僧として薬師如来を造立するにあたり、念頭に根本中堂本尊ないし根本中堂安置の七仏薬師像があっ

たことは想像に難くなく、併せて一堂の本尊ではなく、また等身という法量からは、坐像ではなく、立像であったことが想定されるのではないか⁴¹。想像を逞しくするならば、西方寺像のような像容に、根本中堂像のように左手を屈臂して前方へ突き出した像容を思い浮かべることもできよう。

もちろん、不予の祈祷において薬師を修法対象に選ぶことは、病苦消除の利益を考えればごく自然のなりゆきであったと思われる。一日造立仏かどうかを問わず、不予に際した等身の薬師如来像供養という点でのみ先例を求めれば、仁平四年（1154）六月八日の鳥羽院不予に際した造像例があり、堀河天皇は長治二年（1105）から嘉祥二年（1107）に崩御するまで、等身の七仏薬師像を供養している⁴²。『吾妻鏡』にみられる二例のうち初例は皇族将軍である宗尊親王の不予におけるものであったが、あるいはこうした先例を意識していたかも知れない。いずれにせよ、すでに何らかの慣例があったものとも思えるが、さらに形式化を蒙ったものが、東光寺像をはじめとした造形に至る可能性を主張したい。

ちなみに、鎌倉における天台勢力については、遺品に乏しいこともあり、あまり注目されてこなかったが、近年その見直しが進んでいる。たとえば、平雅行氏⁴³は幕府の宗教政策において天台僧が必ず重用されていることを指摘されている。畿内における大寺院所属の僧侶が鎌倉の公的な仏事に採用されている割合をみると、おおむねの傾向によって以下の四期に分けられる。第一期・源氏将軍時代（1180～1219）には寺門優位であり、第二期・将軍頼朝時代（1219～1246）には東密・寺門・山門の分立がみられ、第三期・時頼・時宗時代（1246～1284）に寺門優位となり、第四期・貞時・高時時代（1284～1333）では再び東密・寺門・山門が分立する、といった勢力範囲になるという。

つまり、山門派か寺門派か、という区別はあるものの、鎌倉においては一貫して天台勢力が盛んであり、天台僧の活躍が広く認められる点は見逃

せない。こうした状況を具体的に示す現存作例には乏しいものの、奥氏⁴⁴は天台僧が鎌倉における薬師造像に関与した可能性も指摘されている。天台勢力の強い鎌倉地方にあって、『吾妻鏡』にみられる二例の一日造立仏に端を発し、その後も周辺でこうした趣の薬師造像が相次いだと考えることも、あながち荒唐ではないだろう。

おわりに——鈿彫像への視点

それでは、最後に要点をまとめたい。鈿彫像の発生について若干触れることで結語にかえたい。

本稿で扱った一連の薬師如来立像について、(1) 波状髪、(2) 印相、(3) 簡略な造形、(4) 立像という点を中心に分析を加え、(1) については、「病苦消除」の期待から、頭上面に波状髪を用いる例に倣ったと解釈し、(2) から (4) については、いずれも延暦寺根本中堂本尊の特徴と類似することを確認した。

さらに、鎌倉時代、とりわけ鎌倉地方における薬師信仰について『吾妻鏡』の記事を検討した結果、後世の規範となるべき薬師造像はいずれも坐像であること、薬師造像には天台僧の関与が多く認められることを指摘しつつ、対象作例との造形的・年代的類似から「一日造立仏」を詳しく取り上げ、こうした特殊な造像が、一連の対象作例においてその典拠となっている可能性を提示した。

天台僧の関わった一日造立仏であれば、根本中堂本尊の印相に倣う立像であったとしても不思議ではない。その契機として、元久二年(1205)の火災を重視したが、根本中堂が火災に遭い、本尊ほか中堂安置の諸像が人目に触れる機会はこれまでも何度かあった。なかでも注目されるのは承平五年(935)の火災で、その時もやはり根本中堂本尊像は堂外に出されて難を逃れているが、興味深いことに10世紀後半以降、根本中堂本尊像の模刻像が増加し、いわゆる天台系薬師として多くの作例をみるに至った

背景に、この火災を契機とする見解が高梨純次氏⁴⁵や浅湫毅氏⁴⁶によって出されている。この火災によって、本尊像の像容が明らかになったかどうかは知られないが、その存在が注目を集める機会になりえたことは容易に想像される。ましてや、元久二年の火災に際しては、慈円という高僧によってその像容が記し留められており、さらにその姿を実見した僧侶が造像に関与する場合、根本中堂像のイメージが何らかの形で反映されることは十分考えられる。



図14 東光院 薬師如来立像

その点で注目されるのは、現在、千葉・東光院に伝来する木造等身薬師如来立像（像高164.7センチ、カヤ材、素地）（図14）である。像表面に荒々しいノミ痕が残る、いわゆる鈍彫像としてよく知られたものだが、頭髪こそ、現状で波状髪とはしないものの、等身の法量、左手を直角に曲げた手のかたちは、根本中堂像を意識したものと考えられる⁴⁷。この像についてとりわけ興味深いのは、近年の修理によって見出されたつぎの像内墨書銘である。

鎌倉自_因御堂薬師像奉_□畢_[]_□綏_因因_因

奉修理為安_置_□依_因因_因

_□寺_因智同勸進金剛佛子圓覚也檀那坂上氏女

文永九年〈大才壬申〉四月十六日⁴⁸

すなわち、文永九年（1272）以前に造立され、また鎌倉よりもたらされたことが判明するが⁴⁹、鎌倉での一日造立仏が文応元年（1260）からみられることを併せ考えると、大変重要な作例といえるだろう。さらに、ここ

に根本中堂像の手勢が採用されている点となれば、これが鉦彫像であることも見逃せない特徴である。従来、鉦彫像（荒彫像とも）については、完成品か、未完成品かという議論があったが、久野健氏⁵⁰による研究以降、造像形式のひとつとして論じられることが多くなり、近年もその発生について様々な見解が出されている⁵¹。本稿も、鉦彫像と認められるものでこそないものの、簡略な仕上げの予想される一日造立仏について論じてきたものだが、ほかでもない根本中堂像が、鉦彫に近い表現であった可能性に触れて稿を終えたい⁵²。

根本中堂像は、周知のごとく最澄自刻と伝えられてきたが、この伝承の発生は存外にはやい。根本中堂像の史料上の初出は、弟子である光定の手になる『伝述一心戒文』（宝亀十年〈779〉～天安二年〈858〉）だが⁵³、やや降って『類聚三代格』所収の太政官符（仁和二年〈886〉七月二十七日付）には最澄の事績として「即造薬師佛像安東塔院」⁵⁴と紹介されている。

つづいて、『天元三年中堂供養願文』（天元三年〈980〉）に至ると、「（最澄）自ら造る」⁵⁵といわれており、同じ箇所には「巧手の手を請わず」とあるため、専門仏師ではなく、最澄が手がけたものと意識されていたことが知られる。源為憲撰『三宝絵』（永観二年〈984〉）にも「像法ノ時ヲスクヒ給ヘトテ（最澄）手ツカラ中堂ノ薬師如来ノ像ヲツクリ」⁵⁶とあり、10世紀後半には一般化していたようだが、こうした認識からは、素朴で簡略な仕上げが予想されよう⁵⁷。たしかに、根本中堂像の当初像を復元的に考察することは困難だが、特異な手勢により根本中堂像とつながる東光院像のような作例を改めて検討することで、鉦彫像の発生についても新たな視野が得られると期待できるのではないだろうか。一連の薬師如来像から、一日造立仏を経て思いがけず鉦彫像に至ったが、内包される問題は多く、今後も検討をつづけていきたい。

註

- ¹ 先行研究は数多くあるものの、奥健夫『清凉寺釈迦如来像』（『日本の美術』513）至文堂、2009年）ほか、津田徹英「善光寺阿弥陀三尊像と清凉寺釈迦如来像の模刻造像の時機——その世界観『三国伝来』へのまなざし」（阿部泰郎編集『中世文学と寺院資料・聖教』竹林舎、2010年）の註29がよく網羅している。
- ² 変形像を含めると、私見では140軀に上るとみられる。これまでに作成された主な一覧は以下の通り。毛利久「清凉寺式釈迦像現存表」（『史迹と美術』285、1958年）。たなかしげひさ「清凉寺釈迦檀像様説——付 さが式釈迦像と論文の略年表・分布一覧表」（『仏教芸術』74、1970年）。前田元重「清凉寺式釈迦如来像現存表」（『金沢文庫研究紀要』11、1974年）。猪川和子「関東の清凉寺式釈迦像」（『美術研究』237、1965年）。同「東国の清凉寺式釈迦如来像」（『三浦古文化』14、1973年）（以上、後、『日本古彫刻史論』講談社、1975年、所収）。同「西国の清凉寺式釈迦如来像（上）（下）」（『美術研究』324・327、1983・1984年）。同「愛媛の清凉寺式釈迦如来像」（『美術研究』330、1984年）。宇野茂樹「近江の清凉寺式釈迦模刻像」（『栗東歴史民俗博物館紀要』1、1995年）。そのほか、先行研究の詳細は津田徹英氏、註1前掲書脚註29を参照のこと。
- ³ 拙稿「江戸川区東善寺蔵薬師如来坐像の図像学的視点について——印相と頭髮表現を中心に」（江戸川区仏教美術調査団・江戸川区教育委員会編集『江戸川区の仏像・仏画』2、江戸川区教育委員会、2013年）。
- ⁴ 表に掲げたものに関する参考文献は以下の通り。山本勉「薬師如来像 東光寺」（『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇、7、中央公論美術出版、2009年）。同「東光寺 薬師如来像」（『東日本に分布する宗教彫像の基礎的調査研究——古代から中世への変容を軸に』平成18年度～20年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書、東北大学、2010年）。若林繁「在地の仏たち」（『会津の仏像』〔会津若松市史〕17）会津若松市、2005年）。瀬谷貴之「太寧寺と本尊薬師如来立像・旧蔵十二神将像」（『祈りの美——奈良国立博物館の名宝』金沢文庫、2005年）。瀬谷貴之「《調査報告》太寧寺所蔵・薬師如来像及び両脇侍像」（『金沢文庫研究』315・319、2005・2007年）。山本勉「太岳院 薬師如来像」（『東日本に分布する宗教彫像の基礎的調査研究』前掲書）。末吉武史「莊厳寺 薬師如来立像」（『空海と九州のみほとけ』福岡市博物館、2006年）。薄井和男・塩澤寛樹「酒井薬師堂 薬師如来立像」（『厚木市史』中世資料編、厚木市、1989年）。山本勉監修『楊谷寺仏像調査報

告書』（清泉女子大学山本勉研究室，2010年5月18日実査，未公刊）。林宏一（作品解説）『美術工芸品（彫刻）所在緊急調査報告書』2（埼玉県立博物館，1986年，図版50・56）。

⁵ 楊谷寺像については，永正元年（1504）伊豆養国寺より現所在へ移転したものと『新編相模国風土記稿』にあるため，当初の所在は知られない。ただ，衣文表現に至るまで東光寺像と類似しており，そこには何らかの関係が推察されよう。

⁶ 瀬谷貴之氏，註4前掲書。

⁷ 紀年銘の読みと制作年代について，山本勉氏よりご教示いただいた。

⁸ 奥健夫「如来の髪型における平安末～鎌倉初期の一動向——波状髪の使用をめぐって」（『仏教芸術』256，2001年）。

⁹ 伴国彦発願像（9世紀前半頃，五尺五寸ないし五尺，朱衣金体）や惟首発願像（貞観元年（859），五尺五寸ないし三寸，朱衣金体）など，その等身を意識した像高，肉身部を金色とし，着衣部を朱彩とする表面彩色からみて，最澄自刻と伝える本尊像に酷似する，一種の模刻像であると考えられる。

¹⁰ 拙稿「室生寺金堂薬師如来立像と天台系薬師如来」（『紀要』13，日本橋学園大学，2014年3月刊行予定）。なお，以下に天台系薬師および根本中堂像の像容に触れた先行研究を挙げる。毛利久「元龜以前の延暦寺根本中堂と安置仏像」（『国宝延暦寺根本中堂及重要文化財根本中堂回廊修理工事報告書』国宝延暦寺根本中堂修理事務所，1955年）（後，『日本仏像史研究』法蔵館，1980年，所収）。久野健「平安初期における延暦寺の仏像」（『美術研究』260，1969年）（後，『平安初期彫刻史の研究』吉川弘文館，1974年，所収）。宇野茂樹「延暦寺の根本薬師像」（『近江路の彫像』雄山閣出版，1974年）。清水善三「延暦寺における天台美術の展開」（『延暦寺・園城寺と西教寺』〔『日本古寺美術全集』10〕集英社，1980年）（後，『仏教美術史の研究』中央公論美術出版，1987年，所収）。松浦正昭「天台薬師像の成立と展開」（『美術史学』15，東北大学，1994年）。紺野敏文「平安彫刻の成立 10」（『仏教芸術』225，1996年）（後，『日本彫刻史の視座』中央公論美術出版，2004年，所収）。津田徹英「書写山円教寺根本堂伝来 滋賀・舎那院蔵 薬師如来坐像をめぐって」（『仏教芸術』250，2000年）。

¹¹ 『覚禅鈔』（『大正新脩大蔵経』図像篇〈以下，『大正図像』〉4，412頁c，435頁a）。『阿婆縛抄』（同8，305頁a）など。

¹² 『大正新脩大蔵経』（以下，『大正蔵』）76，852頁b。

¹³ 施無畏与願印説は清水善三氏，松浦正昭氏らが，智吉祥印説は毛利久氏らが支持されている。註10前掲書。

- ¹⁴ 津田徹英氏，註 10 前掲書。
- ¹⁵ 慈円口伝（慈賢筆）『四帖秘決』（建保年間〈1213～1219〉成立）（『続天台宗全書』密教 3 經典註釈類Ⅱ，360 頁）。
- ¹⁶ 長岡龍作『神護寺薬師如来像の世界』（『国宝と歴史の旅』3）朝日新聞社，1999 年）。
- ¹⁷ 西川杏太郎「法界寺薬師如来像考」（『MUSEUM』162，1964 年）（後，『日本彫刻史論叢』中央公論美術出版，2000 年，所収）。
- ¹⁸ 註 15 に同じ。
- ¹⁹ 速見侑「鎌倉政権と台密修法——忠快・隆弁を中心として」（『中世日本の諸相』下，吉川弘文館，1989 年）。
- ²⁰ 瀬谷貴之氏，註 4 前掲書。
- ²¹ 濱田隆「立像阿弥陀如来迎図成立考——仏坐像から仏立像へ」（『仏教芸術』126，1979 年）。
- ²² 『吾妻鏡』では，源頼朝や北条政子が相模国の薬師霊場を訪れていることが知られるが，日向薬師霊山寺（現宝城坊）や，大磯寺坂の王福寺などに伝えられる平安時代に遡る薬師の古像は，いずれも坐像としている。
- ²³ 根本中堂安置の七仏薬師に言及する最も古い史料である『阿婆縛抄』に「檀像七仏薬師立像」（『大正図像』9，763 頁）とあるほか，『山門堂舎記』にも「檀像」と紹介されている。
- ²⁴ 坪内綾子「史料にみる鎌倉の薬師信仰」（『特別展 薬師如来と十二神将』鎌倉国宝館，2010 年）。
- ²⁵ 今井雅晴「北条義時と寺社および大倉薬師堂の草創（上・下）」（『鎌倉』62・63，1990 年）。
- ²⁶ 従来，建久五年に新造された堂宇を「阿弥陀堂」の誤記と考え，薬師堂は一つと解釈する貫達人氏の説が広く知られていたが，赤星直忠氏より，ともに薬師堂と考える説もあった。近年，秋山哲雄氏が後説を補い，建久四年に北条政子が比較的小規模な薬師堂を建立，続いて翌年に頼朝が阿弥陀堂と対になる薬師堂を建立したと解釈されたが，ここではそれを認めたい。貫達人「永福寺」（『鎌倉市史』社寺編，吉川弘文館，1959 年）。赤星直忠『史蹟名勝天然記念物調査報告書』6（神奈川県教育委員会事務局社会教育課，1938 年）。秋山哲雄「永福寺の成立と展開」（中世鎌倉研究会編集『日本史のなかの永福寺予稿集』中世鎌倉研究会，2005 年）。
- ²⁷ 三浦勝男「鶴岡八幡宮と神仏分離——社蔵宝物等の移動について」（『鎌倉』4，1968 年）。なお，後世の修理によりやや像容を損なっているが，同じく八幡宮から出て現在五島美術館にある愛染明王坐像と，上げ底式内刻りにする仕様

が共通しており、付属の十二神将にも曹源寺像と似るところがあるなどが山本勉氏により指摘されている。山本勉『東国の鎌倉時代彫刻 鎌倉とその周辺』（『日本の美術』537）ぎょうせい、2011 年）。

²⁸ 奥健夫「寿福寺銅造薬師如来像（鶴岡八幡宮伝来）について」（『三浦古文化』53, 1993 年）。

²⁹ ちなみに、先行研究においては、いつ頃の再興像とみるかで見解がわかれているが、詳しくは拙稿を参照のこと（「定印薬師考——覚園寺蔵薬師如来坐像を中心に」林温編集『仏教美術論集』3, 図像学Ⅱ, 竹林舎, 2014 年 3 月刊行予定）。ちなみに、近年は広く弘長三年（1263）頃の再興像とされた田邊三郎助氏の見解が支持されているが、奥健夫氏の指摘にあるように、康安二年（1362）東京・光厳寺蔵釈迦如来坐像や永徳四年（1384）神奈川・来迎寺蔵地藏菩薩坐像など南北朝期の作例との親近性を重くみて、文和三年（1354）のものと考えたい。田邊三郎助「覚園寺薬師堂諸像の造立について」（『覚園寺木造薬師三尊木造十二神将立像修理報告書』覚園寺, 1974 年）（後、『田邊三郎助彫刻史論集』中央公論美術出版, 2001 年）。三山進「覚園寺薬師三尊像考——中尊の造立年代を中心に」（『鎌倉彫刻史論考』有隣堂, 1981 年）。奥健夫「横須賀市・長安寺不動明王坐像と像内銘」（『金沢文庫研究』318, 2007 年）。

³⁰ 速水侑氏, 註 19 前掲書。ちなみに、「殊なる所願」は「勝軍陣」であると指摘されている。

³¹ 新訂増補国史大系『吾妻鏡』後編, 746 頁。

³² 新訂増補国史大系『吾妻鏡』後編, 848 頁。

³³ この折の千手観音像は、現在建長寺に所蔵される千手観音坐像である可能性が塩澤寛樹氏によって指摘されている。以下に述べるような「一日造立仏」との指摘はなされていないものの、「緊急に着手され、完成が急がれた造像」と認められている。塩澤寛樹「鎌倉・建長寺千手観音坐像と『鎌倉派』の仏師」（『鎌倉時代造像論』中央公論美術出版, 2009 年）。

³⁴ 森由紀恵「平安末期における造仏と仏師」（『寧楽史苑』41, 奈良女子大学, 1996 年）。根立研介「院政期の一日造立仏をめぐって」（『前近代における「つかのまの展示」研究』平成 17 年度～平成 20 年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書, 2009 年）。

³⁵ 奥健夫「一日造立仏の再検討」（『論集・東洋日本美術史と現場——見つめる・守る・伝える』竹林舎, 2012 年）。

³⁶ 根立研介氏（註 34 前掲書）によると、事例における初見は元永二年（1119）の鳥羽天皇中宮藤原璋子の出産祈祷であるという。ただ、奥健夫氏（註 35 前

掲書)は『集神州三宝感通録』の事例を引き、中国でもある程度行なわれていたと指摘されている。

³⁷ 「西方寺 木造薬師如来立像」(『奈良県指定文化財 平成2年度版』32, 奈良県教育委員会, 1992年)。

³⁸ 以上は奥健夫氏のご教示による。また、ほかに一日造立仏である可能性を指摘できる建長寺蔵千手観音坐像は、すぐれた出来映えであるのにくわえ、後補であるものの漆箔仕上げとし、とりわけ簡略というような印象は受けない。ただ、一日という制作日数それ自体はありうるもので、たとえば滋賀・来迎寺蔵阿弥陀三尊像は文永六年(1269)六月十五日の供養が銘文より確かめられるが、追善の対象となる西園寺実氏は六月七日に亡くなっており、少なくとも八日で銘記を記す段階に至ったことが判明する。報告された岩田茂樹氏も「迅速な造像」と注記されるが、修理者の高橋利明氏の言によれば、「時間的には充分可能」という(岩田茂樹「信楽・来迎寺の院快・院静・院禅作木造阿弥陀三尊像について」『MUSEUM』640, 2012年)。あくまで一般的な阿弥陀三尊というべき作である点、院派仏師の手になる点を踏まえると、建久四年(1193)一月八日、後鳥羽天皇の疱瘡治癒を祈願した七仏薬師法の折、院尊によって「等身薬師如来像七軀」が「一兩日」で造立されていることも想起される。「一兩日」の解釈も問題となろうが、数日で等身の薬師如来が七軀あらわされている点、「一日造立仏」としては造立されていないものの、この種の造仏における表現を考える際に検討すべき課題であるといえよう。「等身薬師如来像七軀、新造之、く佛師院尊、彫刻之、僅一兩日之内、終其功也、件用途仰可然之人々七人、令下之行佛師之許了」(九条兼実『玉葉』建久四年正月八日条)。

³⁹ 脇本十九郎「荒彫仏像論」(『美術研究』32, 1934年)。他、田中喜作氏もこうした造像を重視されている。田中喜作「荒彫像の問題」(『画説』60, 1941年)。

⁴⁰ 平雅行「鎌倉寺門派の成立と展開」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』49, 2009年)。

⁴¹ ちなみに、一日造立仏である廃燈明寺像は「等身」と明記されている。奥健夫氏、註35前掲書。

⁴² 森由紀恵氏、註34前掲書。

⁴³ 平雅行「鎌倉山門派の成立と展開」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』40, 2000年)。同「鎌倉幕府と延暦寺」(『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館, 2002年)。同氏、註40前掲書。

⁴⁴ 奥健夫氏、註28前掲書。

⁴⁵ 高梨純次「滋賀・金居原薬師堂木造薬師如来立像再論——平安中期における

- 延暦寺根本中堂本尊像の「形」の認識についての試論』（『美術史論叢 造形と文化』雄山閣，2000 年）。
- ⁴⁶ 浅湊毅「伝統の継承——最澄自刻の薬師と円仁請来の阿弥陀」（『最澄と天台の国宝』読売新聞社，2005 年）。
- ⁴⁷ 『千葉県指定有形文化財 木造薬師如来立像修理報告書』（東光院，1981 年）。ほか、『房総の仏像彫刻』（千葉県教育委員会，1993 年，206 頁）。東光院像と根本中堂像の類似については、奥健夫氏よりご教示いただいた。
- ⁴⁸ 久野健編『造像銘記集成』（東京堂出版，1985 年，488 番，279 頁）。註 47 前掲書，14 頁写真を参照。奥健夫氏のご教示による。
- ⁴⁹ 文意からは「修理銘」と捉えるべきものだが，左右二材，前後三材の木寄せからなる構造，理知的な顔立ちや，衲衣の初層および覆肩衣の端を衲衣の縁にかける着衣形式，衣端の写実的な表現からは鎌倉時代，まさに 13 世紀後半頃の造形を示すといつてよく，「修理」というよりむしろ「再興」を意味するものかとも解釈される。また，原所在については，仮に「赤」と読んだ漢字の判別が困難であり，具体的な堂宇の特定には至っておらず，今後の課題としたい。
- ⁵⁰ 久野健「関東の鉦彫について」（久野健編『関東彫刻の研究』学生社，1964 年）。他，同「鉦彫仏像論——鉦彫りの発生に関する試論」（『仏教芸術』85，1972 年）（後，『平安初期彫刻史の研究』吉川弘文館，1974 年）など。
- ⁵¹ 高梨純次「鉦彫造像考——東日本の彫刻史的世界の中で」（『文化史学』35，1979 年，同志社大学文化史学会）。安藤佳香「素木像における「未完成」の意義について」（『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』30，1985 年）。浅井和春「岡山・安住院所蔵の伝聖観音菩薩立像に関する一考察——いわゆる鉦彫り像の成立について」（『仏教芸術』240，1998 年）。鈴木麻里子「山梨・慈眼寺の鉦彫像と神仏習合像にみる未完成表現について」（『仏教芸術』314，2011 年）ほか。
- ⁵² 根本中堂像と鉦彫像や立木仏との関係については，奥健夫氏にご教示いただくとともに，下記文献を参照した。奥健夫「誓光寺十一面観音像と像内納入品」（『仏教芸術』292，2007 年）。同「書写山円教寺創建期造像の調査研究」（『鹿島美術研究』28 号別冊，2011 年）。同，註 35 前掲書。とりわけ後者では，後に紹介する『天元三年中堂供養願文』（天元三年〈980〉）における根本中堂像に対する最澄自刻伝承が，造立時期の判明する最古の立木仏であった円教寺の如意輪観音像の造像伝承（『一乗妙行悉地菩薩性空上人伝』寛弘七年〈1010〉頃）に影響を与えたことが指摘されており，造像観のあり方を巡って大変興味深い。
- ⁵³ 「年分二度者不寄義眞圓澄兩大德寄中堂薬師佛竝比叡大神文」（『大正藏』74，

649 頁 a) とあり、最澄自刻とは述べられていない。

⁵⁴ 新訂増補国史大系『類聚三代格』前編，73 頁。

⁵⁵ 「良源敬白。根本大師之始闢此山也。攀翠嶺而結庵。踰蒼海而求法。愍堪忍世界之多苦。願薬師如来之垂慈。不情巧手之人。自造等身之像。削一柿而堕涙。願六趣而祝恩」とある（『群書類従』24，590 頁）。

⁵⁶ 『三宝絵集成』（笠間書院，1980 年，230 頁）。なお、一連の史料を奥健夫氏は「高僧による仏像自造伝説のはしり」と評価されている（註 1 前掲書，54 頁）。

⁵⁷ 奥健夫氏は、くわえてそこに「仏を刻む音を聴くことによる功德を、像表面にとどめられたノミ痕を目にすることにより拝者が追体験するという効果」があった可能性を示唆されている。奥健夫氏，註 35 前掲論文，252 頁。

表 1 波状髪を有する薬師如来立像一覧

指定	所在	所有者	像高 (cm)	材質	仕上	年代 (和暦)	年代 (西暦)	宗派	備考
県指定	神奈川	東光寺	128.1	木造	素地	建長8年	1256	天台宗	『東光寺縁起』(万治4年[1661])
県指定	山形	慈光明院	39.4	銅造	鍍金	建治3年	1277	天台宗	
県指定	福島	薬師寺	158.2	木造	素地	建治4年	1278	真言宗	
県指定	奈良	安養寺 (現:西方寺)	167.2	木造	素地	弘安元年	1278	(現:融通念仏宗)	「薬師如来造立泰加結縁交名」納入(1598名の結縁者名)一曰造立(6月17日か18日)
県指定	(現:新潟)	(現:龍蔵寺)	97.0	木造	素地	鎌倉時代前期	12-13世紀	(現:曹洞宗)	天正15年(1587)創建
市指定	(現:神奈川)	(現:太寧寺)	151.2	木造	漆箔	鎌倉時代	13世紀	真言宗(?) →臨済宗	建立など詳細不明(前身は薬師寺[真言宗]、勝福寺[円覚寺末]とも)
市指定	(現:山梨)	(現:宝鏡寺)	115.8	木造	素地	鎌倉時代	13世紀	真言宗(?) →無住	鈴木麻里子氏よりご教示いただいた
市指定	千葉	滝山寺	162.0	木造	古色	鎌倉時代	13世紀後半	真言宗	
	東京	法真寺	38.7	木造	素地	鎌倉時代	13世紀後半	天台宗→日蓮宗	
	福岡	志賀海神社 (現:莊嚴寺)	128.5	木造	古色	鎌倉時代後期	13世紀	(現:臨済宗)	もと本地仏(寺伝)、神仏分離により現所在へ
県指定	(現:千葉)	引根寺 (現:尊覺寺)	164.0	木造	素地	鎌倉時代	13-14世紀	真言宗→曹洞宗	明徳元年(1390)中島城主海上山城守(常直)城内に観音・薬師・地藏の三尊を安置
県指定	茨城	観音寺	81.0	木造	素地	鎌倉時代	13-14世紀	真言律宗	
	(現:神奈川)	薬師堂 (現:太岳院)	152.0	木造	古色	貞治3年	1364	(現:曹洞宗)	山本勘氏よりご教示いただいた
	(現:岐阜)	(現:南泉寺)	120.0	木造	素地	鎌倉- 南北朝時代	14世紀		
	神奈川	酒井薬師堂 (現:法雲寺)	95.0	木造	素地	南北朝時代	14世紀	(現:浄土宗)	古寺および薬師堂を天正年間に再興(法雲寺碑)
市指定	千葉	正光寺	105.0	木造	漆箔	南北朝- 室町時代	14-15世紀	真言宗	延文3年(正平13年,1358)創建時の安置か (「千葉県印旛郡誌」)
町指定	静岡	薬国寺 (現:神奈川)	144.0	木造	素地	文明13年	1481	天台宗	「本尊薬師、長四尺八寸、行基作」また永正元年(1504)伊豆薬国寺より移転(「新編相模国風土記稿」)
	(現:埼玉)	(現:薬師堂)	101.4	木造	素地	室町時代	15世紀		大永7年(1527)再興銘札 髪は平彫りとする
	埼玉	東昌寺	71.7	木造	漆箔	室町時代	15世紀		

表 2 鎌倉時代における薬師信仰

和暦	西暦	月日	将軍	執権	事項
治承 4	1180	10.16			源頼朝、鶴岡若宮にて薬師経など勸行する（若宮供僧が奉仕） （鎮護国家三部：法華経・仁王経・最勝王経ほか、大般若経、観世音経、薬師経、寿命経など） （源頼朝）、薬師経 100 巻を誦読（鶴岡供僧）
文治 2	1186	05.08			【寺塔以下注文書】毛越寺内金堂円隆寺に雲慶（運慶）作薬師丈六同十二神将像あり（藤原基衡造営）
文治 5	1189	09.17			【寺塔以下注文書】毛越寺内嘉勝寺に薬師丈六あり（藤原秀衡造営）
建久 2	1191	01.08			今年中、毎日薬師経 12 巻を読誦すべきこと、鶴岡若宮の供僧と伊豆箱根山の衆徒に仰せあり
建久 3	1192	02.06			1 月 3 日、弘教寺金堂焼亡、本尊は薬師像、ほか日光菩薩、毘沙門天など焼失
建久 3	1192	08.09	源頼朝		北条政子、安産祈願の為、鶴岡・相模の国の神社・仏寺 27 箇所（神馬を奉り、誦経を修する） *福田寺（酒匂）、平等寺（鹿田）、範隆寺（平塚）、宗元寺（三浦）、常盤寺（城所）、王福寺（坂下）、新養寺（小磯）、高麗寺（大磯）、国分寺（一宮下）、弘教寺（波多野）、五大寺（八幡、大倉の御堂と号す）、寺務寺、観音寺（磯目）、大山寺、靈山寺（日向）、大相模惣社（柳田）、一の宮（佐河大明神）、二の宮（河匂大明神）、三の宮（冠大明神）、四の宮（前相大明神）、八幡宮、天満宮、五頭宮、黒部宮（平塚）、賀茂（柳下）、新日吉（柳田）
建久 4	1193	11.08	源頼朝		永福寺薬師堂の供養導師として、前権僧正真円（亮）が京都より到着（比企能員宅に）
建久 4	1193	11.27	源頼朝		永福寺薬師堂を建立・供養（源頼朝、多数の随兵をとまない参列）供養導師：真円（亮）
建久 5	1194	08.08	源頼朝		源頼朝、息女大姫の病平癒の為、随兵を多数ともなつて日向薬師へ参詣 *日向薬師は行基建立の薬師如来の霊場、相模国内にて効験は無双という
建久 5	1194	10.18	源頼朝		源頼朝、歯痛祈禱の為、足利義兼を使として日向薬師へ参詣
建久 5	1194	12.02	源頼朝		御願寺社に奉行人を置く、永福寺薬師堂（今新造）は毛呂季光、三善康清、平盛時の担当
建久 5	1194	12.26	源頼朝		永福寺新造薬師堂を供養（源頼朝、多数の随兵をとまない参列）供養導師：前権僧正勝賢
建久 5	1194	12.28	源頼朝		源頼朝、北条政子と万寿（頼家）をとまない新造薬師堂へ参詣
建仁 3	1203	09.02	源頼家	北条時政	源頼朝、名越邸にて薬師如来像を供養供養導師：義上律師（栄西） *比企能員を仏事に呼び、謀殺（比企能員の愛）
建仁 3	1203	11.15	源実朝	北条時政	寺社奉行の改訂、永福寺薬師堂は源（大仁）親広、千葉兵衛尉、藤民部丞の担当
元久 2	1205	10.02	源実朝	北条義時	比叡山上にて火災、本尊を含む安置仏像を救出、北谷虚蔵尾彼岸所へ移安する（翌 3 日、戻す）
承元 2	1208	12.12	源実朝	北条義時	鶴岡八幡宮神宮寺に薬師如来像を安置（奉行は橘恒広）
承元 2	1208	12.16	源実朝	北条義時	源実朝、鶴岡八幡宮神宮寺本尊薬師如来像を拝見
承元 2	1208	12.17	源実朝	北条義時	鶴岡八幡宮神宮寺薬師如来像の間隠供養（北条義時・大江広元ら参列） 供養導師：眞智房法隆隆宣（八幡宮供僧の一和尚、日光山別当を兼ねる）
承元 4	1210	06.08	源実朝	北条義時	北条政子、弟北条時房と源（大仁）親広をとまない日向薬師へ参詣
建暦 1	1211	03.19	源実朝	北条義時	奈良法師、蓮華王院宝蔵を破り、銀の薬師像 1 軀と御願 20 を盗む

表 2 続き

和暦	西暦	月日	将軍	執権	事項
建暦 1	1211	07.08	源実朝	北条義時	北条政子、源実朝夫人とともに、多数の随兵をともない日向薬師へ参詣
建暦 1	1211	11.16	源実朝	北条義時	北条政子、鶴岡八幡宮神宮寺に金銅薬師三尊像(3尺)を安置(供養導師：円如房阿闍梨遍曜)
建暦 3	1213	12.04	源実朝	北条義時	源実朝、持仏堂にて薬師法を修す(隆宣法橋)
建保 4	1216	02.11	源実朝	北条義時	源実朝、持仏堂に七仏薬師像造立を發願(奉行は二階堂行光・同行村ら)
建保 4	1216	05.10	源実朝	北条義時	源実朝、持仏堂に七仏薬師像を安置・供養(供養導師：小河法印忠快) 七仏薬師法を修す(11日～18日)
建保 4	1216	05.18	源実朝	北条義時	七仏薬師法、結願(北条義時、北条泰時ら着座)
建保 6	1218	07.09	源実朝	北条義時	北条義時、戌神将の靈夢を見て、大倉薬師堂の建立を發願
建保 6	1218	12.02	源実朝	北条義時	大倉薬師堂に雲龍(運龍)作の薬師如来像を安置・供養(北条義時、北条泰時、北条朝時ら参列) 供養導師：莊嚴房律師行勇、呪願：圓如房阿闍梨遍曜、堂達：頓覺房良喜(若宮供僧)
承久 1	1219	01.27	源実朝	北条義時	源実朝、鶴岡八幡宮別当公院により殺害
承久 1	1219	02.08		北条義時	北条義時、大倉薬師堂へ参詣
承久 2	1220	06.10		北条義時	先月 24 日、昨年 12 月の翌星の為、延暦寺根本中堂にて千僧説経(薬師経)
承久 3	1221	12.11		北条義時	北条義時夫人発願の薬師如来像、産所にて供養(供養導師：伊賀阿闍梨光猷)
貞応 2	1223	09.10		北条義時	天婆の御祈、薬師護摩は大連僧都親基
貞応 2	1223	12.03		北条義時	北条重時邸にて光物の為、大倉薬師堂にて御祈
貞応 3	1224	10.16		北条泰時	天婆の御祈、薬師護摩は左大臣律師
安貞 2	1228	05.22	藤原頼経	北条泰時	御祈、薬師護摩は大連僧都
寛喜 3	1231	12.26	藤原頼経	北条泰時	明年、太一一定分凡の御祈の為、本尊として薬師・観音・不動を造立(供養導師：信濃法印道禅)
嘉禄 1	1235	12.27	藤原頼経	北条泰時	將軍不例の為、大仏師康定(康運弟子)、仏像を造り始める(明後日 29 日には終えるように) *千休薬師像(1尺6寸)、細腰星、計都星、御本名星、薬師像
嘉禄 1	1235	12.30	藤原頼経	北条泰時	昨晚、康定、仏像(千休薬師・祿存星[本命星]・羅計二星など)を造り終え、江法印良信の本坊にて供養 供養導師：江法印良信
延応 1	1239	05.05	藤原頼経	北条泰時	將軍不例の為、御祈、薬師護摩は大藏御法印
延応 2	1240	01.08	藤原頼経	北条泰時	雪星が歳星に近づいた為、天婆の御祈、薬師は承決法印
仁治 4	1243	02.02	藤原頼経	北条経時	大倉薬師堂焼亡、本尊は取り出す
寛元 1	1243	09.27	藤原頼経	北条経時	北条時頼、薬師如来像造立を發願
寛元 2	1244	01.08	藤原頼経	北条経時	天婆の御祈、薬師は大藏御傳正
寛元 2	1244	06.03	藤原頼経	北条経時	天婆の御祈、薬師供は民部卿法印
寛元 2	1244	07.23	藤原頼経	北条経時	將軍家の御祈として薬師法を修す(大納言法印隆弁が奉仕)

鎌倉時代の特異な薬師立像と一日造立仏との関わりについて

表 2 続き

和暦	西暦	月日	将軍	執権	事項
寛元 3	1245	02.19	藤原頼嗣	北条経時	若君（藤原頼経）の不例の為、薬師護摩を修す（宮内卿法印）
寛元 3	1245	02.25	藤原頼嗣	北条経時	藤原頼経の不例の為、七壇の薬師御修法あり *同壇：大僧正御房、各壇：御僧正、信濃僧正、如意寺法印、大夫法印、師法印、民部卿法印、弁僧都
寛元 3	1245	12.24	藤原頼嗣	北条経時	明年正月朔日蝕により、御祈、薬師護摩は師僧正
寛元 4	1246	05.14	藤原頼嗣	北条時頼	天変ならびに月食により、御祈、薬師護摩は岡崎僧正成源
寛元 4	1246	09.27	藤原頼嗣	北条時頼	北条時頼、夫人の安産祈願の為、御祈、薬師護摩は鶴岡の別当法印（隆弁）
建長 2	1250	02.08	藤原頼嗣	北条時頼	北条時頼、大倉薬師堂へ病中参詣
建長 2	1250	12.08	藤原頼嗣	北条時頼	北条時頼、夫人の安産祈願の為、大倉薬師堂へ参詣
建長 2	1250	12.13	藤原頼嗣	北条時頼	北条時頼、夫人の安産祈願の為、御祈、薬師護摩は鶴岡の別当法印（隆弁）
建長 3	1251	01.08	藤原頼嗣	北条時頼	北条時頼、夫人の安産祈願の為、金銅薬師如来像（8寸）を造立・供養 供養導師：鶴岡の別当法印（隆弁か）、長日の薬師供もはじめる
建長 3	1251	10.07	藤原頼嗣	北条時頼	大倉薬師堂焼亡
建長 4	1252	01.09	藤原頼嗣	北条時頼	北条時頼、「室家」懐妊の祈禱の為、薬師護摩を修す（若宮法印）
建長 4	1252	06.02	宗尊親王	北条時頼	将軍家の御祈として、薬師護摩を修すべきとの田仰せあり
建長 5	1253	04.26	宗尊親王	北条時頼	北条時頼、同子息の祈禱の為、七仏薬師像を造立・供養（供養導師：若宮の僧正隆弁） *同日、信濃国善光寺の修造・供養あり（導師：大夫堅者維真）
建長 7	1256	09.03	宗尊親王	北条時頼	将軍家赤斑瘡の祈禱として薬師護摩を修す（松殿法印良基・左大臣法印嚴恵がそれぞれ）
文応 1	1260	08.12	宗尊親王	北条長時	北条時宗、将軍（宗尊親王）御願の為、一日中に将軍と等身の薬師如来像を造立・供養 供養導師：尊家法印、また薬師法を修す
弘長 3	1263	03.10	宗尊親王	北条長時	大倉薬師堂修造・供養（真言供養）（供養導師：遠江僧都公朝）
弘長 3	1263	11.08	宗尊親王	北条長時	北条時頼、病悩の為、今日中に等身の千手菩薩像を造立・供養（供養導師：松殿僧正良基） 同じく、一日の内に等身の薬師如来像を造立・供養（供養導師：尊家法印） 同じく、等身の薬師如来果像を用い三師社にて護摩を修す（供養導師：尊海法印）

図版出典

- 図 1・2・3・4・8 『東日本に分布する宗教彫像の基礎的調査研究』（平成 18～20 年度科学研究費補助金（基盤研究 A）研究成果報告書，2010 年）
- 図 5 『仏教彫刻調査報告書』（大磯町教育委員会，1980 年）
- 図 6 『金沢文庫の名宝』（金沢文庫，2005 年）
- 図 7 『西国三十三所』（奈良国立博物館，2008 年）
- 図 9 『魅惑の仏像』24（毎日新聞社，1993 年）
- 図 10 清水真澄編集『日本の仏像大百科』1，如来（ぎょうせい，1990 年）
- 図 11・13 『奈良県指定文化財 平成 2 年度版』32（奈良県教育委員会，1992 年）
- 図 12 奥健夫「一日造立仏の再検討」（『論集・東洋日本美術史と現場 一見つめる・守る・伝える』竹林舎，2012 年）
- 図 14 『千葉県指定有形文化財 木造薬師如来立像修理報告書』（東光院，1981 年）

付記

本稿は，2013 年 7 月の美学会東部会例会（於慶應義塾大学）での口頭発表の内容に基づき，加筆修正したものです。執筆にあたり，慶應義塾大学教授・林温先生，同・内藤正人先生，同・大石昌史先生のご指導をいただきました。また，同名誉教授・紺野敏文先生，日本橋学館大学教授・塩澤寛樹先生，文化庁主任文化財調査官・奥健夫先生，清泉女子大学教授・山本勉先生，南アルプス市文化財保護審議会委員・鈴木麻里子氏には，折々にご助言を賜りました。末尾ながらここに記して，深甚の感謝の意を表したいと思います。なお，本稿は平成 24 年度および 25 年度高梨学術奨励基金研究助成による研究成果の一部です。

追記

脱稿後の 12 月 15 日，「おわりに」で触れた千葉・東光院蔵薬師如来立像について東北大学を中心とした調査がおこなわれ，その成果は有賀祥隆（研究代表者）『生身と霊験—宗教的意味をふまえた仏像の基礎的調査研究』（平成 23・24・25 年度科学研究費補助金（基盤研究 A）研究成果報告書，課題番号 23242010，2014 年 3 月刊行予定），および『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇（2015 年 2 月刊行予定）に収録されるため，参照されたい（執筆はいずれも武笠朗氏）。